難民伝

亀井昭

イラクのクルド人はオスマン帝国の勇士であった。今も中東を中心に世界には三千万人のクルド人が居ますが、「国を持たない世界最大の民族と云われています」。

独自の文化を持ち、第一次大戦後、英仏ロシアなどの交渉（セーブル条約）で住んでいる所の真ん中に国境線がひかれ、トルコやイラン、イラク、シリア領に分断された。それ以来各国による迫害や同化を迫られる苦難の歴史を歩んできた。

イラクではイラン・イラク戦争中の一九八八年、クルドの一グループが反逆したことで、フセイン政権軍が報復として毒ガスを散布し、自国内のクルド人五〇〇〇人を虐殺する事件が起きた。九一年の湾岸戦争後、英米軍がクルド人居住地域に展開し、イスラム国と戦った。フセイン政権軍は撤退。クルド人は九二年、選挙によりＫＲＧ（クルデスタン地域政府）を発足させた。そして二〇〇五年制定のイラク新憲法で、やっと正式に自治権を勝ち取った。ＫＲＧが創設したペシュメルカはＩＳを制圧した。キルク―ク州などで米軍と連携してＩＳ掃討の最前線に立ち、ＩＳ（イスラム国）を撤退に追い込んでＫＲＧが同州を実効支配する事につなげた。

これらの事を年表にそって記述すると、

- 一九二〇年セーブル条約が結ばれた。
- 一九二二年オスマン帝国崩壊。クルド人の住む地域はトルコ・イラク・イランなどに分割された。
- 千九七九年イラン・イラク戦争開始。多数のクルド人が毒ガスにより虐殺された。（ハラブジャ事件）が起こる。
- 一九九一年湾岸戦争後、フセイン政権軍がクルド人地区から撤退。
- 一九九二年クルデスタン地域政府（ＫＲＧ）が発足。
- 二〇〇三年イラク戦争開始、フセイン政権崩壊九二年クルデスタン地区政府発足。
- 二〇〇三年イラク戦争開始。フセイン政権崩壊。
- 二〇〇五年イラク新憲法で正式にクルデスタンの自治を承認
- 二〇一四年「イスラム国」ＩＳが勢力を伸ばし「Ｋ

ＲＧ」軍事組織と交戦。
・二〇一七年イラク軍などがＩＳ拠点のモスルを奪還した
今年二〇一七年九月二五日、「クルデスタン北部自治政府」は独立の賛否を問う住民投票を行った。九二パーセントが独立賛成となったが、その結果イラクを分裂させ、中東をさらに不安定にさせるとしてイラク政府や周辺国は反発している。
「国を持たない最大の民族」クルド人は様々な迫害を受けて来た。住民投票で独立派が九二パーセントを占めてもクルド人の独立が難しいのは、既存の領有国が石油などの資源確保のため、地域を手放したくないからです。
イラクには、イスラム国（ＩＳ）がクルド人居住区まで侵攻してきたから、イラク政府はＩＳに対抗するため、クルド人の協力を求めるとともに、独立には否定的ながら、一定の自治を認めた。二〇〇六年にイラク北部にクルド人自治区を設定した。その自治政府は「ペシュメルガ―」（死を恐れぬ者）と呼ばれる治安部隊を持っています。一方シリアにもクルド人部隊（民主統一党）の武装組織人民防衛隊（ＹＰＧ）があります。いずれの部隊にも女性が参加しています。軍隊に女性がいると性の問題が生じます。テレビでそのことを描いた番組がありました。大変な問題だと感じましたが、砂漠のように乾いた感情だけが伝わった。クルド人の少女は部隊に帰って行った。
二〇〇七年ムスリムの男と駆け落ちをしようとヤスデイ教からムスリムに改宗しようとした一七歳の少女が家族らによるリンチで殺されてしまった。
その様子が公開されると名誉殺人を肯定する者と否定する人との間に論争が起こった。サダムフセインは名誉殺人否定派でフセインが死ぬと名誉殺人は広く行われるようになった。少女はヤスデイ教からムスリムに改宗しようとしただけで、殺されてしまった。国連のイラク人権調査では、名誉殺人はクルド人社会では広く行われている。
クルド人はイランやトルコなどのザクロス山系で育った山岳民族を母体としているらしい。今はシリア・イラク・トルコなどの山岳地帯に二千五百万から三千万人が暮らしている。中でもトルコには一千万人が暮らしています。トルコ政府と対立している。
クルド人はフセイン政権下で化学兵器によって虐殺されたことなどがあり、クルド人は「悲劇の民」とも呼ばれている。クルド人の独立志向は強く、イラク政

府や欧米などはクルド人の独立には反対の立場を取っている。しかし完全に抑え込む事は難しく、二〇〇六年イラク政府はペシュメルガ（死を恐れぬ者）と呼ばれるクルド人部隊をＩＳ（イスラム国）向けの治安部隊を造った。治安部隊には女性も加わり十六歳の女性に十一人の兵隊が襲い、女性は妊娠し出産の時に死亡した事もあり、混乱は今も続いている。どうしてクルド人は国を持たないのだろうか？

第一次大戦後、勝利した連合軍と破れたオスマントルコ軍との間でセーブル条約が結ばれた。クルド人の独立も認められました。だがその後条約は破棄され、英仏はオスマントルコを分割、民族の分布を配慮しない国境線を引いたせいで民族はバラバラになってしまいました。トルコではクルド語の教育や民族衣装すらも禁止され、弾圧を受けてきました。それに反発したのが、（クルド労働党）ＰＫＫです。トルコやアメリカはテロ組織に指定しています。オジャラン党首は「死も恐れぬ者」（ペシュメルガ―）を持っていてＩＳと戦っています。シリアにもクルド人勢力「民主統一党」「人民防衛隊」があります。いずれの部隊にも女性が参加しています。

日本にもクルド人は住んでいて、埼玉県蕨市や、川口市などに六百人位住んでいる。日本に住んでいるクルド人はクルドの中で一番安全なのではないかと思います。日本人は世界の紛争について学習しないので、硝煙の中から這い出た人も自分が犯罪を犯さない限り、安全が保障される、女友達が出来、結婚出来ればその一族の安全も保障される。

私の友達にもそのような人がいる。東京の下町で手広く薬局を中心に雑貨屋さんを営んでいるのだが、学生時代にトルコに住むクルド人と友達になり、トルコまで行き結婚した。丸ぽちゃ顔のやや太り気味の淑子さんは、トルコのクルド人集落に行ってビックリした。ちゃんとした便所が無い、家の中は床が無い野外テント暮らしだった。すぐに彼を連れて逃げだした。

今では彼を養っている。時々熱川まで遊びに来るが、私も年寄りになり思い至らないようになった。豚肉などの料理を出したら遊びに来なくなった。その後、淑子ちゃんはアフガニスタン人のクルド人の大男と結婚した。

あるとき、インド人の男と別れてインドの空港で日本に帰ろうと思いたたずんでいたら、日本人の中年の男が誘いの言葉をかけてきた。

「お嬢さん、今晩、いかがですか？」
淑子さんは、
「私はそこらの女とは違うの。よそを当たっておくれ！」と言ったのに、平気な顔でニヤニヤしているので、淑子さんはビックリして、
「私はインド人、パキスタン人、アフガニスタン人、クルデスタン人、その他いっぱいの男と寝た女なのよ！」
男は少しも騒がず、
「大変脂っこいのを食べたんですネ、たまにはお茶ずけサラサラもいいものですよ！」と言った。
　それも良いかなと思い、インドの空港近くのホテルでお茶ずけを食べたそうだ。淑子さんはお茶ずけを一杯食べてとても満足したそうだ。今でも時々その商社マンの男と会うそうだ。
　この前も淑子さんはアフガニスタン人を連れて遊びに来てくれた。淑子さんが若い頃嫁に行った男だそうだ。アフガニスタンは一夫多妻制でお嫁に行った時には第四夫人だったそうだ。第一夫人はお年寄りで婦人達の世話係。
「今夜はお前が夫の世話をしろ」
と言われれば夫の側に行くが、かってに男の側に行く事は出来ない。第一夫人が根回しして、平等に男の側に行く事になっているそうだ。
　またあるとき、
「モシモシ淑子ですがこれからペシャワールまで行きます。アフガニスタンの彼から電話で助けて下さいと言って来たのよ」
「スリランカの彼はどうするのですか？」
「どうなるか解らないけどとりあえず、緊急だから行きます」
一週間位してまた彼女から電話が来た。
「モシモシ淑子です。ペシャワールから今帰ったのよ！」
「彼はどうでしたか、一緒に帰って来たのですか？」
「そうヨ、一緒です」
「どうでしたかアフガンの男は？」
私が聞くと、
「最高だったわよ！ヨカッタワ！」

　考えると私と淑子さんは不思議な関係なのだ。
淑子さんとはスリランカからの帰りの飛行機で出会った。淑子さんはスリランカに居る男の子に会いに行った帰りだという。スリランカ人の男は美男子が多く、

褐色の肌はすべすべして、まことに従順で何でも思いがかなうのだそうで、日本人の女には都合のよいスリランカ男なのだそうだ。スリランカ男同好サークルみたいなものが自然にできたようで、私がスリランカに二回目に行くときは、淑子さんを通じて、知らない女から電話で頼まれた。

「私の男が浮気していないか調べて来てはしい」

スリランカの男にあったが、スリランカ男は日本の彼女をそんなに問題にしていなくて、

「月に五千円のお手当じゃ少ない、もっとお手当を増やしてくれと言って下さい」

とお手当の増額を頼まれてしまった。

スリランカの女をかこっている男は知らないけれど、スリランカの男をかこっている女はいっぱい知っている。六十過ぎの女が二十歳代の男を弄び、狂っているのは見るに堪えなかった。男と孫と両方が手に入り、お金を使って甘やかす様子など見るにつけても日本の女はそれもお婆ちゃんはすさまじく、オゾマシイ者に見えた。

スリランカはインド南端のコモリン岬から転げ出したさつま芋のような形をしている。赤道近くにあるので一年中暑い。今まで三回位行ったが雨期には断続的に激しい雨が降る。

今年二〇十七年五月にも大雨が降って一一三名の方が死亡した。インドは医薬品や食料を積んだ船をスリランカで一番大きな港コロンボの港に着岸した。日本はブッダの絵の書いてあるエプロンを贈ったが、スリランカの税関当局は「冒涜」だと怒ったそうだ。スリランカは偶像崇拝を厳しく禁じている。それでもスリランカ観光の目玉は古い仏跡である。ブッダの絵の描いてあるエプロンがスリランカの復興支援になると思っている人がいるエライサンがいることが問題だ。ジャイカや日本赤十字など、役人は上から目線で、めぐんでやっているから、日本の援助は紐付きになってしまう。

スリランカの海は美しい。砂浜で泳いでいると、イカが一緒に泳いでくる。スルメイカだった。浅い所に追い込んで捕まえようとするが、逃げられてしまった。

続